

鳩巢文集に載せたる鳩巢記に云ふ。

元祿三年秋。余在賀陽。得永氏廢宅在城西者。買而居焉。蓋余仕賀十有九年。始得有家安處免於遷徙之勞。於是名其宅。曰鳩巢。而人有問之者。余笑而應之。詩不云乎。維鷗有巢。維鳩居之。蓋鷗性也拙矣。不能自蓄租以巢。而來居鷗之巢。故詩人見而詠之亦足以見其博物之一端矣。余材腐力弱。拙於治生。如一字之屋數楹之室。其用力之至輕。而人生有待之急者。猶不能蚤自任土木之事。而遂求他人舊築。以爲棲息之計。則世之至拙者。莫余若也。今夫鳥之有巢也。自鷗鷦燕雀之微。皆有以能之。而鳩乃不能焉。常以居他鳥之巢。則其視余也。可謂異類而同拙矣。既以名宅。奚曰不宜。顧其屋宇湫隘。土地卑濕。加以歷年既久。牆壁崩壞。此世之聰明豪雋材力自好者所不堪也。非余之拙其誰能居之。孔子曰。君子食無求飽。居無求安。何者其志有在。而不暇及安飽也。余於君子之志。雖日勉勵而不及。然食求飽居求安者。豈其本心也哉。是其於室家之美結構之完。不獨有不能。亦有不爲者存焉。此余之所以安於窮陋而不悔也。若余之所樂則有之。公退之暇。每遇良辰美景。

即其室之北窓。以讀書詠詩。悠然自得。不知日之將夕。至其默契千載之前。豪蕩一醉之間。超然出於人世之表。而獨與造物者遊。毀譽得喪死生窮達。無帶芥於胸中。而世之可喜可厭可憐可懼者。無復一毫容於其間。不知夫輪奐雕鏤高大之觀爲何美也。廣厦細旃聲伎之奉爲何樂也。幸市鄆之近。朝夕以得所求。可供甘旨以奉親。可沽酒肉以待客。亦小人之利也。此豈不足可樂而養其拙哉。始余之至此。嘗從隣翁。而問此宇之所自焉。則曰自永氏未居於斯也。有青氏者始卜築於茲。未幾其人死。子孫他遷。而後永氏居之。二世而亡。當青氏卜築之時。吾及見之。安知其爲永氏之所居乎。方吾與永氏往來。如今日於吾子。又安知吾子來居之乎。曾歲月之幾何。其變遷如此。又安知吾子後不有。何人繼而居之乎。余聞而悲之。夫人生不常。何足控揣。而世之營々。欲務爲宮室服御之美。以圖久遠者。嗚呼亦愚矣。君子仁以爲宅。義以爲路。居安宅而行正路。施爲事業著爲文章。生也有光於當時。死也不朽於後世。此與夫外物之奉取快一時。不待其盡。而忽焉以亡。其始盡一生之力。以得之。僅足。以湮滅而無聞者。其得失何如哉。嗚呼君子所

以自強於道。而不以此易彼者。其由是也歟。夫巧者不足多。而拙者不足少。於隣翁之言益信。故并書以傳之。以俟來者觀焉。四年五月二十七日記。

右は、鳩巢翁、元祿三年の秋金澤にて古家を買得て爰に移り、翌四年の五月此の文を筆記せられたるものなり。按ずるに、鳩巢翁は、寛文十二年二月十八日年甫めて十四歳にて、前田家へ扶持せられしより、今元祿三年の秋居宅を買得らるゝに至るまで實に十九ヶ年也。さてその永氏廢宅とあるもの、即ち此の長町六番丁の果なる古家なるべし。彼の記中に、自永氏未居於斯也。有青氏者。始卜築於茲。未幾其人死。子孫他遷。而後永氏居之。二世而亡。とある青氏は、即ち延寶の金澤圖に載せたる青木義兵衛なる事いちじるし。此の人初めて此の地を下し、居家を建築し、其の時の事鳩巢の隣翁も見聞せしと聞ゆ。青木氏程なく歿し、子孫他へ移り、其の跡へ永井氏二代居住し、さて其の跡をば鳩巢翁買得られしもの也。此の邸宅は、法船寺町の裏にて、商家へ程近く、日用整物に辨利なるにより、彼の記中に、幸市鄆之近。朝夕以得所求。可供甘旨以奉親。可沽酒肉以待

客。亦小人之利也。とは記載せし事知られけり。鳩巢文集に、江府より歸郷の時金澤の作あり。

爲客三秋盡。歸家十月初。金城連果樹。綺陌盛輿輿。白嶺雪相待。黑津鷗自如。慈親瞻望久。先報倚門闕。

按ずるに、此の作詩も、長町の邸宅へ歸着せられし時の作ならんか。おもふに鳩巢の號は、此の古家を得られたりしゆゑの嘉號にして、鳩巢の號を以て學力を天下に轟かせしも、不思議の値遇といふべし。故に長文といへども鳩巢記をば爰に記載す。

○室鳩巢傳

鳩巢文集の伊東貞の序に云ふ。先生。姓室氏。諱直清。字師禮。號鳩巢。稱新助。幼名順祥。命齋曰靜儉。其先熊谷直實之裔。出于備中國英賀郡。考諱玄樸。號草庵。妣平野氏。萬治戊戌元年。產先生于州之谷中邑。生有異質。睿敏絕人。入官賀齋。一日在公前。講大學章句。公嘆曰。真英物也。豈使令是待。使成其材以爲天下之器。不亦可乎。即命之受業於順庵先生之門。客於京師。以神童稱。云々と。按ずるに、吾が舊藩五世參議中將綱紀卿の、初めて室順祥を扶持し